



領域代表からのご挨拶

千葉大学 グローバル関係融合研究センター長 酒井啓子

2016年に採択された、文部科学省が実施する科学研究費助成事業「新学術領域研究：グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立・社会科学の確立」（略称「グローバル関係学」）は、2021年3月末を以て、5年間の研究期間を終了いたします。研究事業の実施にあたっては、多くの方々のご協力、ご助言やご指導を頂きました。この場を借りて、深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

「グローバル関係学」では、情報や思想、モノやカネ、人の移動のグローバル化などの影響を受け、複雑に絡み合うことによって、もたらされている現在のグローバルな危機を、関係主義的視座から分析することに力点を置いてきました。その出発点には、10年前に発生した「アラブの春」、その波及の一種として生じたシリア内戦やイエメン内戦、治安の悪化に平行して登場し世界を震撼させた「イスラーム国」（IS）、さらにはそれらの危機の結果急増した難民の問題などがありました。こうしたグローバルに連鎖、波及する「危機」を読み解くためには、我々の眼前に明示的に「見える」主体を分析すれば十分だというのではなく、我々の目には「見えない」、主語のないようなさまざまな事象、「流れ」をいかにして見るか、その流れの交錯をどう分析するかという課題を掲げたのが、「グローバル関係学」だったのです。

研究開始から5年、その最終年度に、まさに「関係性」が引き起こしたグローバルな危機が、世界を恐怖に陥れました。新型コロナ・ウィルスの感染拡大です。ウィルスには、主体としての意思も意図もない。それが接触によって人間社会に感染の広がりを起こすという点で、主体ではなく関係こそが問題だという典型的な例だと言えましょう。この、国境も人種もパスポートも無関係に広がる感染症に対して、国家主体はその境界を閉ざし、移動を止め、関係を断つことで対抗しようとしています。ウィルスというトランクショナルで無限の広がりをいかに主体がコントロールできるか、関係性の広がりによって成り立ってきた現代の経済、外交、文化伝播は、ウィルスのような「波及してほしくないもの」を遮断・排除することができるのか、世界は深刻な岐路に直面しているといえるでしょう。まさに「グローバル関係学」の視点こそが、「今」我々が向き合う危機的状況に立ち向かうために、必要だと確信しています。

その一方で、研究の遂行上コロナ禍が大きな障害となったことは否めません。研究対象である中東、アフリカ、アジア、東欧などの現地調査や現地研究者との研究交流は不可欠ですが、海外はむろん、国内でも移動して人と接する調査が丸一年間できなかったことは、致命的でした。フィールド調査を軸に地域研究を行ってきた研究者にとっては、試練の年となりました。

しかしながら、障害は同時に発明と工夫を生みます。海外に行けない、対面で会えない分、オンラインでの討議、発信の機会が増えました。2020年6月以来、実に40件弱ものワークショップやセミナーが開催されたのです（共催含む）。それにより、これまで会えなかつた現地の研究者や作家などにも、直接話を聞くことができました。その意味ではコロナ禍は、国家領域や主体の枠組に縛られない、新たなネットワークを模索するいいチャンスを与えてくれたといえるでしょう。

研究期間は終了しますが、「グローバル関係学」を生かした研究を本格化させるのは、これからだと思います。今後も「グローバル関係学」の挑戦に、ぜひ、ご協力とご助言をいただければ幸甚です。

2020年度の主要な活動（領域全体）

「グローバル関係学」研究事業最終年度にあたる2020年の最大の活動は、5年間の研究成果を取

りまとめて、岩波書店から7巻本のシリーズ「グローバル関係学」を刊行したことです。

「グローバル関係学」とは何か

二一世紀に入り、ISなど武装勢力の突発的な出現、国家破綻と内戦の頻発、路上抗議行動の連鎖など、世界で動乱が多発している。大規模な人の移動が発生し、反動で排外主義や偏狭なナショナリズムが進行している。新型コロナウイルスの世界的感染拡大は、「グローバルな危機」そのものだ。

これらの「グローバルな危機」の、広範な波及性や連鎖性、唐突さは、必ずしも現代にのみ特徴的なものではない。しかし、その原因や背景の多くについて、主に欧米の国家主体を分析対象としてきた従来の学問分野は、十分に解明できていない。なぜなら、既存の学問分野が「主語」のある、主体の明確な出来事しか分析対象とせず、伝統的・古典的な主体中心主義の視座を取っているために、今起きている現象とますます乖離してきているからである。

それに対して、本シリーズが提唱する「グローバル関係学」は、主体よりもその間で交錯するさまざまな「関係性」を分析することに重きを置く。関係性が双方向、複方向的に交錯し連鎖するなかで出来事が起きると捉え、関係性の網のなかにこそ、濶や瘤のように「主体」が浮き彫りになると考える。

「グローバル関係学」とは、狭い範囲の地域共同体から超領域的グローバルなネットワークまで、非欧米世界を含めた世界を総体として把握する視座を確立し、主体中心的視座で「みえなかつた／みなかつた」ものを、関係中心的視座から「みえる」ようにすることを目的とする新しい学問である。

刊行にあたって

（編集代表　酒井啓子）

グローバル関係学に集う代表者、分担研究者は、2018年後半からシリーズの企画を議論してきましたが、それぞれの計画研究での研究成果を生かしつつ、同時に実施してきた計画研究横断プロジェクト(移民難民プロジェクト、他者認識・パーセプションプロジェクト、方法論探求プロジェクト)での個別・共同研究も盛り込んで、7巻構成とすることになりました。

第1巻は理論編ともいべき巻で、「グローバル関係学」の目的や理論的背景を説明するとともに、近接する議論を盛り込みました。また、関係学的視座に立った研究を実際にはどのような方法で実施するのか、さまざまな分析手法を模索したのが、第1巻です。

第2~5、7巻は、計画研究A1からB3までの研究成果をそれぞれまとめた巻となりました。さらに第6巻は、横断プロジェクトで進めてきた移民難民をテーマに取り上げました。執筆陣は、計画研究の枠に限定されず、また公募研究者や国内外

の領域外の研究者の寄稿を招いて、よりビビッドで最新の議論を取りまとめました。

刊行は2020年9月から平均1か月一冊のペースで進められ、刊行される都度、編者、執筆者がそれぞれの担当章を簡単に説明する読書会(ブック・ローンチ)をオンラインで実施しました。各巻とも、その巻のテーマにあったコメンテーターに登壇いただき、貴重な質問とご意見をいただきました。例えば、第1巻では石田淳(東大、以下敬称略)、小川有美(立教大)、第2巻では黒木英充(東外大)、西川賢(津田塾大)、佐原徹哉(明大)、第3巻では大庭三枝(神奈川大)、熊倉正修(明治学院大)、第4巻では窪田悠一(日大)、第5巻では中野嘉子(香港大)、藤原辰史(京大)、第7巻では木畑洋一(成城大)、石川登(京大)と、錚々たる先生方からのコメントをいただきました。大変参考になる助言ばかりで、ますます研究をブラッシュアップしていくねばと感じるブック・ローンチになりました。



<その他の活動>

(i) オンライン公開研究会、セミナーの実施

コロナ禍で移動、対面会議ができなくなったことから、領域全体でオンライン会議ができるよう、システムを整えました。その結果、ひと月当たり平均6件ものセミナー、ワークショップをオンラインで開催、一般に公開するとともに、一部は録画を領域のHPに掲載しました。

そのなかには、前述の叢書ブック・ローンチの他、コロナ禍の現状を中東、アフリカなど現地の研究者、援助機関などとつないで議論するセミナー・シリーズを実施しました。また現地研究者と欧米の第一線の研究者を集めて英語でのセミナー

を実施したり、シリアやイラクの作家へのインタビューが実施できたことは、貴重な経験となりました。

(ii) 公募研究

領域全体では、2021年2月15-16日に、これまで公募研究者として個別に研究を続けてこられた方々に、研究報告を行っていただき、各計画研究者の分担者などが討論者として密な討議を行いました。特に2019-20年度に採択された公募研究者は、コロナ禍で領域全体と対面で共同研究を実施する機会があまりなかったことから、領域全体と議論を交わす、有意義な機会となりました(公募研究者報告会の報告動画[一部]は、関係学のHPでご覧いただけます)。



各巻編集担当による編集後記

第1巻 『グローバル関係学とは何か』(酒井啓子編)

第1巻は、シリーズの最初ということで、「グローバル関係学」の基本的な視座、枠組みを提示する巻として設定されました。が、そもそも「関係学」の発想は国際関係論はもちろん、社会学や文化人類学、心理学と、あらゆる学問にそのルーツをもつものです。関連する学問分野を勉強しながら過程で、多くのことを学んだとともに、改めて底の深さに、戦慄。刊行した後、海外の歴史学の先生方から「グローバル・ヒストリーをどう位置付けるの?」と突っ込まれ、「ああ、まだまだ学ばなければならないことは山のようにある」と痛感しました。その意味では、コロナ禍で巣ごもりを余儀なくされたことは、たくさんの先行研究を読む良い機会になりました。その勉強の成果が、ちゃんと読者に届くといいのですが……(酒井)。

第2巻 『「境界」に現れる危機』(松永泰行編)

第2巻では、パキスタンからフランスまで、さまざまな国家やその境界において生じたグローバルな危機の思いがけない背景を、「因果の水流の状況依存的な錯綜」として分析しました。文脈と時間軸上の関係性を重視する社会科学の試みとして、歴史研究者からどう評価されるか気になるところです(松永)。

第3巻 『多元化する地域統合』(石戸光・鈴木絢女編)

第3巻は、「グローバル関係学」を「国家間関係を超えた関係性を重視する新たな学問領域」と理解した上で、国家間関係や企業による貿易や生産ネットワークという従来の見方を超えて、EUやASEANなどの地域組織、国家、企業、産業団体、消費者、宗教・民族集団、政治家個人といった、マクロ、メゾ、ミクロそれぞれの階層の主体が関係を紡ぎながら相互作用し、政治経済的地域統合の促進や停滞といったダイナミクスを創出させるという視点に立つ12の章から成ります。公式には国家間の対立や協調の結果として進行する地域統合の促進と分断が、実は国家内部の個人や集団、国境を越えて広がる様々なネットワークに大きく影響されている状況を多少なりとも描写できていれば幸甚です(石戸・鈴木)。

第4巻『紛争が変える国家』(末近浩太・遠藤貢編)

2020年度は、本プロジェクトに加えて、都合2期10年続いてきたアフリカ関連のプロジェクトの最終年度でした。そのため、そちらの最終成果編集(英文での出版)とも時期的に微妙に重なりながらの作業であったほか、すべてPDF上の編集ということで「初体験」の連続でした。ひとまず、両方とも大過なく刊行できたので、安堵しています。多謝(遠藤)。

第4巻の課題設定やアプローチは、既存の研究分野、例えば、紛争研究や「国家性」、あるいはガバナンス研究と重なる部分が比較的大きく、「グローバル関係学」らしさを出すことに苦慮しました。しかし、完成した本を見ていると、各執筆者のそれぞれの工夫もあり、それなりに新しい視座を提示することができたのではないかでしょうか。重なる部分が大きい、ということは、それらの研究分野との接点が多いということでもあります。様々な分野の研究者と協働して、今後の研究の発展を目指したいと思います(末近)。

第5巻『「みえない関係性」をみせる』(福田宏・後藤絵美編)

第5巻は、B01班「規範とアイデンティティ」の研究成果として生まれました。当初は、スポーツや音楽、装いや社会運動といったトピックごとに議論を進めてきたのですが、それらをまとめて一冊の本にするというのがなかなかの難問でした。とはいっても、サッカーのように世界の共通言語となっている(ように見える)現象から関係性を読み解くという作業は、グローバル関係学にとって非常に重要なアプローチの仕方ではないかと思います。第5巻では御協力頂いた方々のごく一部しか御論考を収録できておりませんが、今回のプロジェクトで得られたネットワークと知見を基盤として、B01班の研究をさらに発展させていきたいと考えています(福田)。

第6巻『移民現象の新展開』(松尾昌樹・森千香子編)

森先生と一緒に仕事ができしたこと、また多くの先生方のご協力で移民現象を新しい角度から考察することができたのは、大きな収穫でした。機会を下さった酒井先生に感謝申し上げます(松尾)。

酒井先生が提唱された「見えない関係性を掘り起こす」作業を移民研究の分野に適用すると何が見えてくるのか、ということを考えて作った本です。学問分野も対象地域も異なる松尾先生と一緒に本を作ることは、大変知的に豊かな経験でした。また執筆くださった先生方の論考からもたくさんの刺激を受け、この仕事を通じて視野が広がった気がします(森)。

第7巻『ローカルと世界を結ぶ』(五十嵐誠一・酒井啓子編)

第7巻は、計画研究B01の研究テーマのひとつであるトランサンショナルな規範の波及をめぐる研究と、計画研究B03の研究テーマであるローカルからグローバルへと広がる広域ネットワークをめぐる研究を結び合わせて編まれたものです。ローカルな主体が国家主体を飛び越してグローバルな国際機関につながる、その縦横無尽さにこそ、現代のネットワークのあり方がよく現れています。執筆も大詰めとなった頃、新型コロナ・ウィルスが発見されました。感染症という、国境を無視したウィルスの広がりを見て、急遽海外の研究者に寄稿を求めました。研究期間の最後の段階にきて、また新たな課題を突き付けられた気持ちです(酒井)。

2018-20 年度の主要な活動（各計画研究）

計画研究 A01「国家と制度：固定化された関係性」

計画研究 A01 では、2018 年 6 月に「グローバル関係学」確立のための新たな方法論探究プロジェクトとの共催で「インドネシア世論調査報告会」、10 月に B01 班と共に研究会「現代トルコにグローバル関係学する」、2019 年 1 月に国際ワークショップ "Islam with Adjectives and Islami as Adjectives" を東京で開催しました。さらに 2019 年 1 月にトルコにて、"Turkish-Japanese Joint Research Workshop on Migration," また 2019 年 6 月に "Refugees and Internally Displaced Persons in Post-war Serbia" を東京で開催しました。2019 年 9 月には、和文の成果報告書の執筆準備のための研究会を開催し、刊行にむけて議論を始めた結果、岩波叢書「グローバル関係学」第 2 卷『「境界」に現れる危機』を 2021 年 2 月に刊行しました。

計画研究 A02「政治経済的地域統合」

計画研究 A02 では、地域統合の分断・統合の要因について、地球規模(マクロ)、国家間(メソ)および国家内部(ミクロ)の階層を横断する主体間関係の複雑性に留意しながら、地域統合の変容についての研究活動を推進しました。主な研究関連活動として、宇都宮大学にて国際シンポジウム「新たな政治経済地図：エネルギー資源、移民、政治経済的地域統合」を開催し、中東とエネルギー資源に関する研究で著名なジャコモ・ルキアーニ氏(ジュネーブ国際開発高等研究所教授)をお招きして活発な意見交換を行いました(2019 年 2 月)。また中国の一帯一路政策に影響力を持つ林毅夫(リンイーフー)・北京大学国家発展研究院長(元世界銀行・上級副総裁)による講演会を千葉大学にて開催しました(2019 年 12 月)。その後、コロナ禍を受けて、ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと地域・統合」を開催しました(会議開催記録参照)。

2018 年 6 月より 2020 年 3 月にかけては、「ASEAN の縮図」といわれるミャンマーの元首相に研究協

力を得ながら、同国の国家統合の課題(民族間の分断およびいわゆるロヒンギャ難民問題)についての同氏の著作を日本語・英語に訳出し、解題を付して計 4 冊刊行しました。5 年間の地域統合に関する諸研究の集大成として、岩波書店よりグローバル関係学の研究叢書・第 3 卷『多元化する地域統合』を刊行し(2021 年 1 月)、出版記念のオンラインセミナーも開催しました(2021 年 2 月)。研究期間の終了後も、さらに地域統合に関する英語書籍の出版を見据えて活動していきます。

研究成果の社会への普及・還元活動としては、APEC、ASEAN など地域統合を実施する国際機関、参議院、外務省、経済産業省など政府機関に研究で得られた情報・知見の提供を継続的に行い、アジア太平洋および日本の地域統合に関する実際の政策立案に活かしていただいています。研究期間の終了後も、得られた研究成果の社会への普及・還元を継続していきます。

計画研究 B01「規範とアイデンティティ：社会的紐帶とナショナリズムの間」

計画研究 B01 は、「記憶・表象・権威」をキーワードとして、規範とアイデンティティの時間的な継承とグローバルな広がりを見る上で歴史的記憶を取り上げること、映像、音楽、服装など非言語的な表象に現れる文化的、政治的、歴史的意味を読み解くこと、そして社会において権威がいかに確立されるのかを宗派ネットワーク、ジェンダー、「見た目」などの文化的歴史的要因から読み解くことに注目してきました。特に 2018 年は、世界中で学生運動や市民運動の高まりがみられた 1968 年から半世紀を振り返る「1968 年再考」シンポジウムを 12 月 15-16 日に開催し、西欧、東欧の事例のみならず中東、アフリカ、ラテンアメリカの事例を横断的に検証しました。特に日本の事例について小熊英二(慶應大)、クラウディア・デリッチ(ベルリン・フンボルト大学)両先生を招聘して、

基調講演をお願いしました。続いて 2019 年は、11 月にワークショップ「音楽とグローバル関係学」を開催、中東のラップ、ユーゴスラヴィアのロック、ブラジルの歌謡祭を取り上げた報告を行いました。一方で京都大学を中心に「装いと規範」ワークショップを毎年実施し、服装に象徴される国民意識の変遷をさまざまな地域の事例を対象に分析してきました。これらのワークショップの成果は、岩波叢書「グローバル関係学」第 5 卷として出版されました。その他、映画や本を取り上げて議論するワークショップやオンライン読書会を頻繁に実施しました。

なお、2017-18 年に公募研究者として南米先住民運動に関する研究を行ってきた宮地隆廣が 2019 年度から本計画研究に参加し、佐川らとともに叢書第 7 卷に成果を発表しました。

計画研究 B02 「越境的非国家ネットワーク：国家破綻と紛争」

計画研究 B02 では、近年深刻な国際問題となっている紛争や内戦に着目し、それらの結果として起こる「国家破綻」の実態と、その権力の空白に生じる非国家主体とその越境的ネットワークの実態の分析に取り組んできました。これは、国家の主権や領域の存在を前提としながらも、それらの必ずしも縛られない人びとの営みや共同体認識を析出し、グローバルな「関係性」のなかでその意義を捉え直す作業もありました。

2016 年 10 月からの 4 年半の研究期間において、まず、最大の成果は、人びとの国家観を析出するという目的を掲げ、シリア、イラク、リビア、ソマリア、ボスニア、イランといった紛争国、あるいは紛争や政情不安を経験した国での世論調査を実施できましたことでした。これらの調査結果は、国際的にも非常に貴重なデータとなると同時に、統一された質問票を使用したことによって国家間や地域間の比較研究も可能にするものです。これは、新学術領域研究のような大型のプロジェクトでしか成し遂げられなかった成果であると言えます。

計画研究 B02 では、これらのデータを用いて既

存の国家をめぐるエリートと非エリートの「関係性」を浮き彫りにすることに努めました。その結果は、岩波書店から刊行された叢書第 4 卷『紛争が変える国家』に収められた各論考にまとめられていますが、総体として見ると、紛争によって「国家破綻」が起きた際に、人びとは様々な国家観を抱くようになる半面、既存の国家や政治共同体の存在意義を再確認するようになるという現実が看取されました。こうした国家に対するアンビバレン特な感情は、内戦や紛争を戦う政治勢力の間に存在するだけでなく、人びと一人一人の内面にも内包されているかもしれません。

現在の世界には、このような紛争によって既存の国家をいわば拡散に向かわせるベクトルが見られる一方で、「自国第一主義」を掲げて今一度収斂させようとするベクトルも目立つようになってきています。国家破綻と紛争、そして、そこで暮らす人びとの認識を手がかりに国家という存在を問い直す作業は、今後ますます重要な意味を持つのではないかでしょうか。

計画研究 B03：文明と広域ネットワーク：生態圏から思想、経済、運動のグローバル化まで

計画研究 B03 は、国家間関係ではカバーできない、地球規模で共有される諸問題と諸現象が増加している現状を踏まえ、それらの動的展開過程を分野横断的に研究し、個々の社会の基層への影響を捉えつつ、グローバルな問題解決アプローチとグローバル・コモンズ創生の可能性を探ることを目的としてきました。主な活動としては、2018 年 2 月に開催した国際シンポジウム「メコン・コモンズからメコン共同体へ」の成果を英文書籍として公表することをも目的として、引き続きグローバル・コモンズ研究会を 4 回にわたり開催し、コモンズに関する認識の共有と文理融合アプローチの精緻化を目指しました。英文書籍の刊行に向けて協力機関であるメコン機構との共同研究も進めました。英文書籍(書名「From Mekong Commons to Mekong Community」)は、来年度に Routledge 社から刊行される予定です。

2020年2月以降は、新型コロナのために現地調査は中断を余儀なくされました。それまでは個別の調査研究も着実に進めました。研究代表は、タイとラオスを中心にコモンズに関する現地調査を実施しました。また、分担者は、欧州での外交資料調査、アフリカの難民キャンプにおける農業活動・資源配分の実態調査や先住民運動に関する研

究調査、ムスリム同胞団に関する調査、グローバルな先住民運動の展開に関する研究の整理をそれぞれ進め、研究成果を上述の英文書籍と「グローバル関係学」シリーズの第7巻『ローカルと世界を結ぶ』(岩波書店、2020年10月刊行)に寄稿しました。

2020年度 研究者一覧		
氏名	所属・職位	担当
酒井 啓子	千葉大学大学院社会科学研究院教授	領域代表 計画研究B01代表 総括班 国際活動支援班
A01 「国家と制度：固定化された関係性」		
松永 泰行	東京外国语大学大学院総合国際学研究院教授	計画研究 A01 代表 総括班 国際活動支援班
井上 あえか	就実大学人文科学部教授	計画研究 A01
岩坂 将充	北海学園大学法学部准教授	計画研究 A01
鈴木 恵美	福岡女子大学国際文理学部准教授	計画研究 A01
中山 裕美	東京外国语大学総合国際学研究院准教授	計画研究 A01
錦田 愛子	慶應義塾大学法学部准教授	計画研究 A01
増原 綾子	亜細亜大学国際関係学部教授	計画研究 A01
A02 「政治経済的地域統合」		
石戸 光	千葉大学大学院社会科学研究院教授	計画研究 A02 代表 総括班 国際活動支援班
渥美 利弘	明治学院大学経済学部准教授	計画研究 A02
池田 明史	東洋英和女学院大学学長、国際社会学部教授	計画研究 A02
落合 雄彦	龍谷大学法学部教授	計画研究 A02 総括班
鈴木 紗女	同志社大学法学部教授	計画研究 A02 国際活動支援班
畠佐 伸英	大阪経済法科大学経済学部教授	計画研究 A02
水島 治郎	千葉大学大学院社会科学研究院教授	計画研究 A02
B01 「規範とアイデンティティ：社会的紐帶とナショナリズムの間」		
酒井 啓子	千葉大学大学院社会科学研究院教授	領域代表 計画研究B01代表 総括班 国際活動支援班
帶谷 知可	京都大学東南アジア地域研究研究所准教授	計画研究 B01
後藤 紘美	東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク特任准教授、東洋文化研究所准教授(兼務)	計画研究 B01 総括班
小林 正弥	千葉大学大学院社会科学研究院教授	計画研究 B01
佐川 徹	慶應義塾大学文学部准教授	計画研究 B01

福田 宏	成城大学法学部准教授	計画研究 B01
宮地 隆廣	東京大学大学院総合文化研究科准教授	計画研究 B01
山本 薫	慶應義塾大学総合政策学部講師	計画研究 B01
B02 「非国家主体による越境的ネットワーク：国家破綻と紛争」		
末近 浩太	立命館大学国際関係学部教授	計画研究 B02 代表 総括班 国際活動支援班
遠藤 貢	東京大学総合文化研究科教授	計画研究 B02
久保 慶一	早稲田大学政治経済学術院教授	計画研究 B02 国際活動支援班
松本 弘	大東文化大学国際関係学部教授	計画研究 B02
山尾 大	九州大学大学院比較社会文化研究院准教授	計画研究 B02 総括班 国際活動支援班
B03 「文明と広域ネットワーク：生態圏から思想、経済、運動のグローバル化まで」		
五十嵐 誠一	千葉大学大学院社会科学研究院准教授	計画研究 B03 代表 総括班 国際活動支援班
石田 憲	千葉大学大学院社会科学研究院教授	計画研究 B03
高垣 美智子	千葉大学国際教養学部教授	計画研究 B03
松尾 昌樹	宇都宮大学国際学部准教授	計画研究 B03 総括班
丸山 淳子	津田塾大学学芸学部准教授	計画研究 B03
森 千香子	同志社大学社会学部教授	計画研究 B03
横田 貴之	明治大学情報コミュニケーション学部准教授	計画研究 B03

2019-20 年 公募研究者

氏名	所属(2021年3月時点)	研究テーマ
池田 昭光	明治学院大学	現代レバノンのマロン派にみるアイデンティティ再編と社会関係
岡野 英之	近畿大学	越境的非国家ネットワークの研究—シャン人による武力闘争・NGO／CSO・違法薬物
東 聖子	近畿大学	スイク教徒の非国家ネットワークとインド領パンジャーブの現代的危機に関する研究
高光 佳絵	千葉大学	戦間期から冷戦初期に至るアジア・太平洋地域の広域ネットワーク
清野 薫子	東京医科歯科大学	保健医療に係るグローバルパートナーシップ：東アフリカ地域の非感染症対策の事例検証
松本 尚之	横浜国立大学	関係学的視点に基づく協同調査の可能性：東アジア＝アフリカ間の人の移動を事例として
張 雲	新潟大学	国内エピステミック・コミュニティと国際関係の相互認知再形成のメカニズム
玉置 敦彦	中央大学	グローバル政治秩序の研究—アジア太平洋における「埋め込まれたリベラルな国際秩序」
水野 貴之	国立情報学研究所	グローバル時代の複雑化する社会的責任のネットワーク科学による見える化

2020 年度会議等開催記録

年月	日	会議名	会場・形式	主催
2020 年 6 月	18 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中東」第 1 回 「"コロナ"は中東に何をもたらしているか」	オンライン配信	B01
7 月	16 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中東」第 2 回 「湾岸諸国と新型コロナウィルス」	オンライン配信	総括班
	23 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中東」第 3 回 「中東の『with コロナ』新時代を展望する：パレスチナ／イスラエルの現場から」	オンライン配信	総括班
8 月	3 日	Online Book Launch 1 ヤシーン・ハージュ・サーレハ『シリア獄中獄外』を読む —訳者・岡崎弘樹氏を迎えて—	オンライン配信	B01
	5 日	第 1 回 総括班会議	オンライン開催	総括班
	7 日	特別ウェブ・セミナー 「湾岸危機から 30 年：日本と中東のかかわり方はどうあるべきか」	オンライン配信	B01
	28 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと地域・統合」第 1 回 “Traditional medicine and the COVID-19 pandemic in Africa: the case of Cameroon”	オンライン配信	A02
9 月	1 日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『ベル・フックスの「フェミニズム理論」一周辺から中心へ—』	オンライン配信	B01
	3 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中東」第 4 回 「湾岸アラブ諸国と国際移民——コロナ禍は転換点となるか？」	オンライン配信	B01
	15 日	Online Book Launch 2 サマル・ヤズベク『無の国の門：引き裂かれた祖国シリアへの旅』—著者からのメッセージ—	オンライン配信	B01
	18 日	イラン・イラク戦争から 40 年・湾岸危機/湾岸戦争から 30 年 公開シンポジウム「変動する湾岸情勢と日本：危機の時代を前望する」	オンライン配信	B01
	18 日	Online Book Talk 2 巣ごもり読書会『現実を解きほぐすための哲学』	オンライン配信	B01
	29 日	The 2019 Iraqi Protests, One Year On: facts, aims, and prospects	オンライン配信	B01
10 月	1 日	Book Launch 『中東政治学入門』(末近浩太著)	オンライン配信	B02
	1 日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中	オンライン配信	B01

		東」第5回 “Impact of Covid-19 on Energy”		
11月	17日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 1 第1巻『グローバル 関係学とは何か』を語る～執筆者と国際政治学者・比較政治学者が、大激論!	オンライン配信	総括班
	31日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『フェミニズムとイスラーム』	オンライン配信	B01
	5日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中 東」第6回 「中東紛争地におけるコロナ感染症 対策の現状：イエメン、シリア、レバノンの事例 から」	オンライン配信	B01
12月	6日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 2 第4巻『紛争が変え る国家』を語る：紛争下の人びとの多様な国家観 を可視化する	オンライン配信	B02
	20日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 3 第7巻『ローカルと 世界を結ぶ』を語る	オンライン配信	B03
	21日	ワークショップ 「戦間期から冷戦初期に至る 広域ネットワークと国際政治」	オンライン配信	B03
	29日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『The Good Immigrant』	オンライン配信	B01
	4日	International Workshop (オーストラリア国立大ワ ークショップ) “Why do we need Relational Studies in understanding Global Crises?”	オンライン配信	総括班
2021年 1月	12日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 4 第5巻『「みえない関 係性」をみせる』を語る	オンライン配信	B01
	23日	Online Book Launch 3 アフマド・サアダーウィー『バグダードのフラン ケンシュタイン』—著者からのメッセージ	オンライン配信	B01
	6日	連続ウェブ・セミナー「新型コロナウィルスと中 東」第7回 「社会的弱者とコロナ：難民、女性、 子供達への取り組み」	オンライン配信	B01
	10日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『エルサレムのパレスチナ人社 会』	オンライン配信	B01
	26日	ウェブ・セミナー 「バイデン米政権下で中東情 勢はどうなるか」	オンライン配信	B01
	29日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始	オンライン配信	B03

		記念 Book Launch Series 5 第6巻『移民現象の新展開』を語る		
2月	29日	巣ごもり上映会『マダム・ラ・フランス(Madame la France, ma mère et moi)』(サミア・シャラ監督(2012年))	オンライン配信	B03
	30日	巣ごもり上映会『Dalya's Other Country』(ジュリア・メルツァー監督(2017年))	オンライン配信	B03
	6日	ワークショップ 「装いと規範」	オンライン配信	B01
2月	9日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『THE LAST GIRL』	オンライン配信	B01
	15-16日	「グローバル関係学」公募研究者報告会	オンライン配信	総括班
	19日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 6 第3巻『多元化する地域統合』	オンライン配信	A02
	20日	映画シンポジウム：アジアを知る 「ナディアの誓い - On Her Shoulders」	オンライン配信	B01
	23日	ウェブ・セミナー 『アラブの春』を振り返る： 田原牧×竹村和朗×酒井啓子が語る 2011年エジプト』	オンライン配信	B01
	6日	岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始 記念 Book Launch Series 7 第2巻『「境界」に現れる危機』を語る	オンライン配信	A01
3月	11日	第2回総括班・国際活動支援班合同会議	オンライン開催	総括班・ 国際活動 支援班
	12日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』	オンライン配信	B01
	22-25日	12th Iraqi Japanese International Conference "Japan and the Arab World from Oil to Culture: The Iraqi Case"	オンライン配信	B01
	29日	Online Book Talk 巣ごもり読書会『イスラームのアダム』	オンライン配信	B01

2021年3月22日発行

編集責任 酒井啓子

編集協力 上野祥／幸加木文

発行者 酒井啓子

発行所 千葉大学グローバル関係融合研究センター

263-8522 千葉市稻毛区弥生町1-33 千葉大学

Tel. 042-390-2334 e-mail: glblcrss@chiba-u.jp

インターネットホームページ : <http://www.shd.chiba-u.jp/glblcrss/index.html>